

速記における母音表記のさまざまなあり方の研究と一つの試み

～日本語の音韻・頻度等を考慮した速記符号配列の検証～

小谷征勝

連絡先：jzj00052@nifty.com 090-1441-7940

(第1回)

(1) 日本語最初の速記法「田鎖式」の成り立ちからその後の進化を推理する。

1. 私自身、一つの速記法(V式)を設計したが、その過程で得られたものを振り返るときに「個体発生は系統発生を繰り返す」という言葉を思い起こす。

今回改めて「日本速記方式発達史」(武部良明著)を読みながら、田鎖式を初めとする諸式諸案の基本五十音の構成を再検討することによって得られるものを探っていきたい。

2. 現在まで多くの速記者を生み出している方式のほとんどは田鎖式の流れをくんで発展してきたものである。

また、速記設計・創案者で画期的な新方式を発表する人は速記のプロでないことがほとんどであった。

現在速記科学研究会などに関わりを持つ速記研究者にしてもプロの方は少数であるのはその証拠の1つと言えるのではなかろうか。

3. その田鎖系で大きな変革を行ってきた主な方式を見ていきたい。

サイン(線符号に附属する符号)的使用を兼ねたと考えられる「あ行」を除けば、五十音のストローク(線符号)に長短がない田鎖系から、初めて各行に長短を採用したガントレット式は、イギリス出身の語学者、音楽家のエドワード・ガントレットがつくり出した方式である。

4. 加点・濃淡を採用し、中根式を筆頭とする後の単画派の先駆けと言われる武田式を発表した武田千代三郎は教育者であり、県知事・図書館長等を歴任し、「駅伝」の命名者としても知られている。

5. 現在の早稲田式、日速研式等につながる折衷派の元祖たる熊崎式の熊崎健一郎は、新聞記者として活躍し、速記法発表後、熊崎式姓名学を考案している。

6. 「あ行」に五十音の他行と同じく長短2種のストロークを採用し、単画符号に最大の効果をもたらすインツクキ法などの漢字音縮記法を確立した中根正親は、京都大学在学中に速記法を発明した後、両洋学園を創立し、要体教育(学習法)の普及に努めた。

7. これらの速記研究者はすべて、少なくとも最初は速記者ではなかった。もちろん始祖たる田鎖綱紀が速記のプロでなかったのは言うまでもない。

こういう革新的発想の生まれやすいアマチュア速記研究者に加えて、実務に携わりながら地道・堅実な改良を積み重ねてきた百戦錬磨のプロ速記者の努力が、10分間に4,000字を超える速度の発言を紙上にとらえ得る現在の日本語速記法をつくり上げてきたと言える。

そこで、これら先人の功績に大いなる尊敬と感謝の念を持って、いま一度この日本語速記法の五十音符号の成り立ちを調査・分析してみたい。

～ ～ ～ ～ ～ ～

(2) 田鎖式の誕生

1. 田鎖綱紀は、

1854年8月15日(安政元年)盛岡田鎖村で誕生し、1938年(昭和13年)5月3日に85歳で亡くなった。

1872年(明治5年)政府招聘の鉾山技師カーライル博士に仕えた。その夫人の手紙にステノフォノグラフィーが書いてあるのを見て、この英文速記を習得したが、日本語に応用するまでには至らなかった。

1879年(明治12年)神戸で中国語学校を設立し校長となる。速記に再び関心を持ち、

1880年(明治13年)東京に戻り、図書館通いをしながら3年間の研究の後、

1882年(明治15年)福沢諭吉の創刊した「時事新報」第169号に「日本傍聴記録法 榎の家元園子」という見出しで一文を発表した。後に「日本傍聴筆記法」と改称し、

1882年(明治15年)10月28日、未完成ながら講習を開始したのは綱紀28歳の秋のことである。

(田鎖式の実用化は、綱紀の独創的発想と弟子たちが実地使用してフィードバックを重ねた結果がうまく結びつき、完成の方向に進んだと考えられる)

～ ～ ～ ～ ～ ～

2. 田鎖式の五十音の構成

①母音をあらわす「あ行」は、他の行と違って短い符号を使用した。これは英文速記ピットマン系グラハム式での母音のサイン的使用に、日本語の「あ行」の独自性を加味した符号と見られる。

(図1-1参照)

②子音をあらわす各行の符号はピットマン系のストロークによる子音符号を流用した。

Kを「か行」、Sを「さ行」、Tを「た行」、Nを「な行」、Fを「は行」、Mを「ま行」、Rを「ら行」に当て、各行の基本の線符号として採用した。

例外として、「や行」は複線、「わ行」は「あ行」の濃線化で処理した。

(図1-2参照)

③各行の各列は、行(子音)をあらわすストロークに「あ行」類似サインをつけた。これは工夫をしたローマ字表記的発想と言えよう。

(図1-3参照)

④各行に当てられたストロークに列(母音)を象徴するサインをつけた。

「あ列」はストロークのみで表す。

「い列」は点状の最短線(イを象徴するサイン)をつける。

「う列」は縦の短線(ウを象徴するサイン)をつける

「え列」は右傾斜の短線(エを象徴するサイン)をつける

「お列」は左傾斜の短線(オを象徴するサイン)をつける

ただし、「い〜お列」を象徴するサインは「イ・ウ・エ・オ」と抵触しないよう、それぞれの符号と同じものを逆方向に書き進める。書きにくい場合は「ア」に用いられた横短線で代用する。

なお、語句をあらわすために連続する場合は短線を結んで次の線が続ける。もともと、後になって結んだ形が五十音符号の標準となり、結んだ短線サインは書きやすい方向のものを採用するようになっていった。

長さは「あ行」を除けば1種類の範囲に収まっている。

(図1-4参照)

⑤五十音図(田鎖式)の基本形(右欄は連続する場合の形状)

(図1-5参照)

⑥濁音は、対応する清音のストロークを濃線化する。

ピットマン系の有声音・無声音の対応に準じた構成で、K→G、S→Z、T→D、F→Vというふうに、音声に五十音表の対応を加味して構成したと言える。

(図1-6参照)

⑦長音は、現在多くの方式に見られるように加点等を採用している。

ただし、「う・え・お列」は母音符号(サイン)を長くして表す方法も採用している。こ

れについては「ウー・ウウ」、「エー・エエ・エイ」、「オー・オオ・オウ」と、ほぼ同音に聞こえるものに対して同じ書き方をしている。

また、これには日本語の造語力の大きさの源である漢字音を含んでいる。それに対して五十音の短音の結びを長くした簡便な方法を採用しているため、覚えやすく書きやすいシステムになっている。これは無闇に無秩序な略語をつくる手間を減少することにもつながっている。

(図1-7参照)

⑧拗音は、対応する直音に前カギ・濃線化、別符号をつけて表している。

(図1-8参照)

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

結果的にであるかもしれないが、田鎖式の五十音は当時としてすばらしいシステムであったと言える。非常に発展性のある構成で、師弟で完成品をつくり上げていく上で最高の素材となったのではないだろうか。

「第1回」終了。

以下、(図1-1) から (図1-8) まで掲載。

(図1-1)

— 、 | \ /
(小点)
ア(a) イ(i) ウ(u) エ(e) オ(o)

(図1-2)

—) | — \ —)
K→か行 S→さ行 T→た行 N→な行 F→は行 M→ま行 R→ら行

例外として、「や行」は複線、「わ行」は「あ行」の濃線化で処理した。

(図1-3)

— — — — —
K(か行) K(+i) K(+u) K(+e) K(+o)

(図1-4)

「あ列」はストロークのみで表す。

—) | ー ㇏ ㇏ ㇏
カ (K) サ (S) タ (T) ナ (N) ハ (F) マ (M) ラ (R)

「い列」は点状の最短線 (イを象徴するサイン) をつける。

—) ↓ ー ㇏ ㇏ ㇏
キ (K+i) シ (S+i) チ (T+i) ニ (N+i) ヒ (F+i) ミ (M+i) リ (R+i)

「う列」は縦の短線 (ウを象徴するサイン) をつける

—) ↓ ー ㇏ ㇏ ㇏
ク (K+u) ス (S+u) ツ (T+u) ヌ (N+u) フ (F+u) ム (M+u) ル (R+u)

「え列」は右傾斜の短線 (エを象徴するサイン) をつける

→) ↓ ー ㇏ ㇏ ㇏
ケ (K+e) セ (S+e) テ (T+e) ネ (N+e) ヘ (F+e) メ (M+e) レ (R+e)

「お列」は左傾斜の短線 (オを象徴するサイン) をつける

—) ↓ ー ㇏ ㇏ ㇏
コ (K+o) ソ (S+o) ト (T+o) ノ (N+o) ホ (F+o) モ (M+o) ロ (R+o)

(図 1 - 5)

あ列 い列 う列 え列 お列

(連続用)

あ行 - \ | \ /

- \ | \ /

か行 - - - - -

- - - - -

さ行)))))

)))))

た行 | | | | |

| | | | |

な行 - - - - -

- - - - -

は行 \ \ \ \ \

\ \ \ \ \

ま行 - - - - -

- - - - -

や行 / / / / /

/ / / / /

ら行 \ \ \ \ \

\ \ \ \ \

わ行 - \ | \ /

-

~ ~ ~ ~ ~

- - -

キ コ ク

~~~~~

帰国

) ) |

シ セ ツ

~~~~~

施設

| - -

タ ノ ム

~~~~~

頼む

(図1-6)

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| —    | )    |      | ↘    |
| G→が行 | Z→ざ行 | D→だ行 | V→ば行 |

(図1-7)

|    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ┆  | ┆  | →  | →  | —  | ↘  | )  | ┆  |
| ツ  | ツウ | ケ  | ケイ | コ  | コウ | セ  | セイ |
| ┆  | ┆  | ↘  | ↘  | ┆  | ┆  | ┆  | ┆  |
| ツコ | 通行 | ケセ | 形成 | コツ | 交通 | セト | 政党 |

(図1-8)

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| ↘  | ↗  | /  | —  | (  | —  | ↘  |
| キャ | シャ | チャ | ニャ | ヒャ | ミャ | リャ |